

イスラエルの軍事的特性

矢野義昭

イスラエルの国土はわずかに二万二千平方キロ、南北四百七十キロ、東西は最大でも百三十五キロしかない。『ミリバラ二〇〇七』によれば、人口は六百三十五万人だが、そのうちユダヤ人は八二パーセント、五百二十一万人に過ぎない。十九パーセントはアラブ人(三パーセントのキリスト教徒、二パーセントのドルーズ教徒を含む)である。

それだけの人口で、陸軍十二万五千人、海軍八千人、空軍三万五千人、計十六万八千人の正規軍と、八千五十人の準軍隊、さらに予備役として、陸軍三十八万人、海軍三千五百人、空軍二万四千五百人、計四十万八千人を擁している。ユダヤ人の人口比率にすると、正規軍は三・二パーセント、予備役と併せると十一・一パーセントに上る。日本の比率に比べ、正規軍比率で十七倍、予備役を含む総動員人口比率は約五十倍に達する。

このような大量動員が可能な背景には、徹底した徴兵制がある。兵役期間は、ユダヤ人とドルーズ教徒では将校が四十八ヵ月、その他の階級では三十六ヵ月、女性が二十四ヵ月である。なお、他の異教徒は志願制になっている。また戦闘に任ずる予備役に対して、男性は四十一歳まで、一部特別な職務では五十四歳まで、女性も二十四歳または結婚するまで、年次訓練が義務付けられている。

戦力としては、戦略戦力として中距離弾道ミサイル「ジェリコⅡ」と短距離弾道ミサイル「ジェリコⅠ」、計約百基と戦闘爆撃機を保有しており、最大二百発程度の核弾頭を保有しているとみられている。陸軍は二個機甲師団、四個歩兵師団、予備役の八個機甲師団、一個空中機動師団を基幹として、メルカバなどの戦車三千七百両、火砲五千四百門などを、海軍は潜水艦三隻、コルベット級ミサイル艇三隻、哨戒・沿岸警備艇五十二隻を保有し、空軍は、主力戦闘機約四百機、ヘリ約二百七十機、無人機二十二機以上を保有している。

国防費は二〇〇五年度で九八億二千万ドル、対 GNP 費では約八・〇パーセントに上っている。それ以外に、主として米国から二十二億ドルに上る軍事援助を受けている。

このようなイスラエルの周辺アラブ諸国を圧倒する極度の重武装の背景には、祖国を持たないディアスポラとして、二千年にわたり度重なる迫害を受けてきたという、悲惨な歴史がある。「世界中から愛されて滅びるよりも、世界中から憎まれても生き残る方が良い。」というのが、ユダヤ人の信条である。

ユダヤの歴史は約四千年前のアブラハムの時代にまでさかのぼるとされており、一神教の由来が「創世記」には記されている。その後、エジプトで奴隷状態にあったユダヤ民族は、モーゼに率いられエジプトを出て、神が約束した地「エレツ・イスラエル」を目指し、四十年間砂漠をさまようが、その間にモーゼの十戒を神から授かったとされる。

その頃から一民族として意識されるようになり、紀元前一千年頃のソロモン、ダビデの時代にユダヤ王国は栄華を誇った。その後王国は分裂して衰退し、アッシリア、バビロニアに相次いで滅ぼされた。王国滅亡後のバビロンに捕囚となった苦難の中からユダヤ教が

成立した。ユダヤ民族が世界各地を流浪しても民族としての独自性を保ち、国家を再建できたのは、ユダヤ教という精神的支柱を持っていたためと言えよう。

紀元一世紀、ローマの直接支配が始まり、ユダヤ教の祭りを禁じ皇帝を神として崇拝するよう強要するなど、強引なローマ化が進められ、ついにネロの時代にユダヤ人の大規模な反乱が起こった。

紀元七三年、約二年に及ぶ抵抗戦の後、マサダ砦は遂に陥落寸前となったが、砦に立てこもった九百六十七人のユダヤ人は、生きてローマ軍の虜囚となることを潔しとせず、全員が集団自決を遂げた。この事件は、今日でも、ユダヤ民族の自由と独立への気概を示す栄光の歴史としてイスラエルでは讃えられており、イスラエル国防軍の入隊式がマサダ砦の頂上で行われている。当時、約百万人のユダヤ人がローマ軍の犠牲になったとされている。それ以来、ユダヤ人は祖国を持たない民、ディアスポラとして世界をさ迷うことになる。

その後、イスラム教とキリスト教の時代となったが、ユダヤ教はしばしばスケープゴートにされた。ただし、キリスト教世界に比較しイスラム世界は、ユダヤ教徒に対して寛容であった。現代ではイスラエルとイスラム世界は血で血を洗う闘争を繰り返しているが、近代になり生じたことである。オスマン帝国以前のイスラム世界では、ユダヤ教徒は、同じ「啓典の民」として一定の敬意が払われ、布教などは禁じられたものの、定められた税を払えば、商業、学問などの分野での活躍が許された。

他方、中世のキリスト教世界では、ユダヤ教徒はキリスト教徒の血で祭祀を行うといった偏見に満ちた迷信が横行し、社会不安が高まるたびにユダヤ教徒が迫害の対象となった。

しかしフランス革命以降の啓蒙思想の普及に伴い欧州でのユダヤ人の地位は向上し、その国際的な情報ネットワークと金融支配により、多方面で活躍するようになる。それでも第二次大戦中のナチスによる、六百万人に上るユダヤ人虐殺が生起したとされている。その結果、欧州のユダヤ社会は壊滅状態になった。ユダヤ人ほど、祖国を持たない民族の悲劇を味わった民族はないであろう。それが、イスラエル建国の動機にもなり、また現在のイスラエルの、堅固な国防意識の源泉となっている。

逆に、一部のユダヤ人には、ユダヤ教や民族国家を否定して、啓蒙主義や社会主義を信奉する者も現れた。中でもマルクスは、国家を否定し、階級対立を既存の世界秩序の本質と見て、暴力革命による世界的な共産主義社会の樹立を唱えた。ロシア革命の担い手として、レーニン、トロツキー始めユダヤ人が主流を占めたのも、偶然ではない。

ロシア、東欧では十九世紀末に社会不安が高まり、ユダヤ人への迫害が激しさを増した。追われたユダヤ人移民は、主に米国とパレスチナに流れ込んだ。米国のユダヤ人移民は同化が進み、ユダヤ民族としての独自性は薄らいだが、パレスチナへの移民は、逆に現地人との絶えざる闘争に直面することになった。

その背景には、神が約束した「エレット・イスラエル」に帰還し祖国を復興することを目指すシオニズム運動がある。パレスチナにはパレスチナ人が住んでいたが、シオニストは、

現地人の存在を無視して無人の地に入植するような感覚で、土地を買占め大挙して入植したため、現地パレスチナ人との対立が始まった。

対立は、英国による第一次大戦時の二枚舌によりさらに深刻になった。アラブとユダヤの双方の支援を得るため両者にパレスチナ国家建設を約束したのである。第一次大戦後、英国はユダヤ人の入植を当初認めたが、その後制限したため、ユダヤ人の反英闘争が始まった。第二次大戦中、闘争は一時下火になったが、戦後英国が移民制限を強めたため、イルゲンなどのテロ組織による執拗な独立闘争が行われ、英国は委任統治を放棄し国連にパレスチナ統治問題を委任した。国連は三分割案を決議し、ユダヤ人虐殺への同情もあり、イスラエル国家の樹立を認めた。

しかし一九四七年の独立宣言と同時に周辺のアラブ諸国が攻め込んだ。以来、周辺のアラブ諸国との間に、四度にわたる中東戦争が生起している。独立戦争では、アラブ諸国の分裂に乗ずるとともにチェコなどから武器支援を確保し、全人口の一パーセント、六千人の戦死者を出しながらも勝利した。第二次中東戦争では、英仏と共同作戦を展開しシナイ半島を占領した。第三次では、空軍と機甲部隊主力による電撃的な奇襲作戦を成功させ、ナセルのエジプト軍を六日間で壊滅させた。第四次中東戦争では、エジプト軍の奇襲を当初許したものの、その後反撃に転じ、優勢を保ちつつ停戦に持ち込んでいる。

いずれの戦いでも、圧倒的な量的戦力格差を、質の優越と主導的で創造性に富む戦いぶりにより補い、勝利を獲得している。国家の安全と存続がいかに重大かを、過酷な迫害の歴史を通じて、骨身に徹してきたユダヤ人の、過剰なまでの安全保障観に、戦後、平和に安住し独立不羈の気概を失った日本人は、謙虚に学ぶべきであろう。